公益財団法人 日本骨髄バンク 第10回通常評議員会 議事録

1　日　時　　2021年（令和3年）6月25日（金）16時から17時

2　開催方法　コロナ禍の影響によりＷＥＢ会議形式で開催
（本会議をWEB開催することに関して全評議員の同意を得た）

3　定足数　　評議員現在数９名中、９名出席

（１）出　　席：９名（以下五十音順、敬称略）
芦田 信、梅田 正造、小達 一雄、垣添 忠生、河 敬世、関口（大谷）貴子、高坂 久美子、中溝 裕子、溝口 秀明
注）定款第25条に規定する評議員現在数の過半数を充足し、本評議員会は成立した。
（２）欠　　席：０名
（３）出席理事 ：４名 （以下順不同、敬称略）
小寺 良尚、加藤 俊一、佐藤 敏信、鈴木 利治
（４）出席監事 ：１名（敬称略）
椙村 岳央
（５）陪 席 者 ：０名
（６）傍 聴 者 ：０名
（７）事 務 局 ：9名
小川 みどり（事務局長兼移植調整部長）、小島 勝（広報渉外部長）、中尾 るか（ドナーコーディネート部長）、渡邊 善久（総務部長）、五月女 忠雄（関東地区代表）、戸田 泉（移植調整部ＴＬ）、吉川 亜子（ドナーコーディネート部ＴＬ）、竹村 肇（総務部）、上原 淳（総務部）

〔 議 事 〕

4　議長選出

定款第 24 条の規定に基づき、出席評議員による互選の結果、芦田評議員が全会一致で議長に選出された。議長により事務局の出席が認められた。

5　議事録署名人の選出

議長から議事録作成のため議事録署名人 2 名の選出が諮られ、小寺理事長と梅田評議員を選出した。

6　審議事項

第１号議案：令和２年度事業報告（案）
第２号議案：令和２年度患者負担金等支援基金審査結果（案）
第３号議案：令和２年度決算報告（案）
第４号議案：理事の選任（非公開）

第５号議案：監事の辞任と補充選任（非公開）

７　議事の経過の概要と結果（審議事項）（敬称略）

１）第１号議案：令和２年度事業報告（案）

２）第２号議案：令和２年度患者負担金等支援基金審査結果（案）

３）第３号議案：令和２年度決算報告（案）

第 1 号議案、第 2 号議案、第 3 号議案は相互に関連するため一括審議とした。第１号議案を小川事務局長が資料に基づき説明した。

「Ｉ．概況」を説明する。日本骨髄バンク（以下、当法人という）は令和 2 年度事業計画に基づき「普及啓発事業」と「連絡調整事業」を推進した。１．ドナー登録者数、今年度の新規ドナー登録者は 2 万 7218 人となり、前年度 4 万 7655 人に比べて 2 万 437 人減少した。登録者数は 53 万 953 人となった。登録窓口別の内訳は、①献血併行型登録会が 3919 回実施で 1 万 8345 人、②日本赤十字社（以下、日赤という）献血ルームなど固定窓口が 8178 人、③集団登録会が 55 人、④保健所その他が 640 人だった。２．移植数と患者登録数、当法人が仲介した非血縁者間の造血幹細胞移植は計 1096 件、前年度 1232 件より 136 件減少した。累計移植数は 2 万 5330 件に達した。患者登録数は国内 2090 人、海外 394 人の計 2484 人だった。移植件数の内訳である、国内ドナーから国内患者への移植が 1091 件。海外ドナーから国内患者に提供されたのが 3 件。国内ドナーから海外患者への提供は 2 件。国内患者の移植率は 52.3%であった。３．事業の概況である。（1）組織運営である。収支相償の考えに基づき慎重な予算執行に努めた。退職者補充のため、職員を適宜採用した。（2）普及啓発事業である。世界骨髄バンクドナーデーに合わせて、骨髄バンクと関わりのある著名人による骨髄バンク応援メッセージ動画を公開した。コロナ禍により大学での登録会や語りべ登録会等の開催数は減少した。若年層ドナー登録拡大に向け、提供の可能性がある若者を発掘するためのドナーリクルート動画や、産学共同によるドナーリクルートアニメ動画やマンガ冊子等を制作した。対面でのアプローチが困難なコロナ禍で、企業のドナー休暇制度導入を引き続き推進した。ドナーリテンションとして動画投稿サイト「YouTube」公式チャンネルや公式 Facebook、Twitter で情報を随時発信した。各地でドナー登録の推進の要となる「骨髄バンク推進連絡協議会」の設置を推進し、都道府県担当者会議を初めてＷＥＢ開催した。（3）連絡調整事業である。「造血幹細胞移植支援システム」で「医療機関支援機能」を 2020 年 11 月 30 日に稼働させた。これにより医師の作業負担を軽減し、患者登録までの期間短縮にもつながった。（4）個人情報保護に関する事案である。個人情報保護のため、発出業務等の見直しや研修などの対策を継続的かつ広範囲に実施した。職員を対象に毎年実施している「標的型サイバー攻撃に対する模擬訓練」を 2021 年 2 月～3 月に実施した。昨年度同様に職員へ訓練用偽装メールを送り、注意喚起した。開封率は 12%と 2019 年度（8%）に比べて悪化した。（5）新型コロナウイルス感染拡大。新型コロナウイルス感染拡大により、全国大会やドナー登録会、各種研修会など多くの対面イベントが中止となった。職員やコーディネーター向けに行動指針を策定した。地区普及広報委員・説明員には安全確保と感染拡大防止に関する注意喚起文書を複数回発出した。各部で事業継続に必要な施策を打ち、骨髄バンク事業を 1 日も休止することなく今年度を終えた。緊急避難的に造血幹細胞の凍結を認め、今年度は申請が 245 件あり 205 件の移植が年度内に完了した。ドナーとの面談にＷＥＢ会議システムを採用するなど感染防止に万全を期した。

続いて第2号議案を鈴木患者負担金等支援基金審査委員会委員長が資料に基づき説明した。

患者負担金等支援基金審査委員会は今年2月5日と5月24日に、令和2年4月1日から令和3年3月31日までの令和2年度患者負担金の減額免除等を審査した。事務局からの業務報告や関係書類の閲覧など必要と思われる審査手続きにより、個々の免除決定が妥当であり免除額が適正であることを確認した。その結果、令和2年度の患者負担金免除総額は5119万7497円、生活保護受給世帯の患者に対するドナーの入院時差額ベッド代の負担は49万5340円となった。本年度はこの差額ベッド代に事業費6000円を加えた合計50万1340円を、患者負担金等支援基金から一般正味財産へ振り替えることをご承認いただきたい。

続いて第3号議案を渡邊総務部長が資料に基づき説明した。

令和2年度決算報告は財務諸表と正味財産増減計算書（予算対比表）を使って説明する。まずは収入の状況である。一番大きい収入源が医療保険財源収益である。これは移植1件成立につき55万円が当法人に支払われるもので、今年度は6億5万円であった。予算上は6億7650万円で、コロナ禍による移植件数減を受け予算比140件程の減少で、マイナス7645万円となった。次に大きい収入源は受取補助金で4億9892万7000円。次は受取患者負担金の約2億430万円。こちらもコロナ禍の影響を受け、予算比マイナス4200万円程となった。寄付金は予測するのが難しく、予算は1億3500万円程としたが、実際は1億5000万円超の寄付をいただいた。予算比プラス1340万円程となった。コロナ禍で経済的に厳しい状況の中で、多くの個人や団体から力強いご支援をいただいた。過去5年間で最高件数と最高額を記録した。予算で見込んでいた収入は15億6300万円程だったが（実際の）収益は14億5800万円。予算比マイナス1億500万円程となった。次に支出である。予算は15億8390万円程であったが、支出は大きく減った。支出総額は14億2125万円と予算比マイナス1億6200万円程となった。令和2年度は当初マイナス2000万円程の赤字予算を組んでいたが、1億円の減収に対し支出減少が1億6000万円程となり、厳しい状況下にもかかわらず最終的に3679万円の黒字となった。支出で大きく減ったのが臨時雇賃金である。臨時雇賃金は主にコーディネーターの活動費である。コロナ禍によりコーディネーターの活動件数も減り、予算比でマイナス1900万円程となった。旅費交通費は予算として1億900万円程であったが、実際は6000万円程であり、予算比で5000万円程減った。各種イベントや研修会、職員の出張等がコロナ禍で実施できず、その大半をＷＥＢ会議で代替したことによりコスト減となった。通信運搬費の予算は1億2100万円程であったが、実際の支出は9997万円。予算比マイナス2115万円である。主な理由としては、財政状況を考慮して年2回発送していたバンクニュースを1回（2020年夏号・50万件超発送予定）取りやめたことによる。一連の経費減は当法人が努力して減ったものと、コロナ禍に連動するものの両方である。令和2年度4月～6月は移植件数が大きく減り、大きな減収を想定していた。結果としては予算比1億円の減収にとどまり、それ以上に1億6000万円の支出減によって最終的には3679万円の黒字となった。

○監査報告

椙村監事が以下のとおり監査報告した。

令和２年４月１日から令和３年３月 31 日までの令和２年度における監事監査を、令和３年５月 28 日に実施した。監事監査では、佐久間清光会計監査人より会計監査報告の説明を受けたほか、帳簿および関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを行い、計算書類の正確性を確認した。業務執行に関しても業務執行会議や理事会に出席し、業務状況の報告を受けるなど必要と思われる監査を実施した結果、いずれも適正だったのでここに報告する。

以上の説明後、第 1 号議案、第 2 号議案、第 3 号議案を採決した。第 1 号、第 2 号、第 3 号議案は、全会一致で原案どおり可決承認された。

（主な意見等）

〇第 1 号議案

＜垣添＞　ドナー登録者数が前年度比で 2 万人程減少しているとのことだが、最近は回復傾向にあるのか。対がん協会でもがん検診の受診者が例年に比べ 3～4 割減少したのだが、最近は戻ってきている。

＜小島＞　ドナー登録者数はコロナ禍の影響で昨年 4 月と 5 月は前年同月比で 7 割程減少した。その後、徐々に回復しつつあり、現在は月間の新規登録者であればほぼ 100％近く戻ってきている

＜垣添＞　大変素晴らしいことである。もう一点、寄付総額が 1 億 5000 万円と過去 5 年間で過去最高という喜ばしい報告があった。何か特別な努力をしたのか。

＜小島＞　遺贈で多額の寄付をいただいた。努力という点では、多くの方に当法人を寄付対象先として知っていただくため、遺贈用パンフレットを作成するなどした。

＜溝口＞　寄付は法人と個人、どちらかの寄付が増えたのか。

＜小島＞　個人からの寄付が大半を占める。金額だけではなく件数も増えており、多くの方から寄付をいただいているのが特徴である。コロナ禍の影響により医療系（の寄付先）に注目が集まったという側面もあり、その中の一つが当法人への寄付に繋がったのではないかと考えている。

＜溝口＞　自分は難病財団に関わりがある。やはり個人からの寄付が非常に多くなっている。企業は経営が厳しい部分もあり、一般の人たちにＰＲするということもかなり大事と考えている。ドナー登録者数減少は、対面勧誘が難しくなっているということで理解できる。移植件数が減っている理由は何か。

＜小川＞　2020 年は緊急事態宣言が出てからドナーコーディネートを延期にしている。大きく延期したため、コーディネート全体が止まってしまった影響である。3 カ月ほど止まったため、当該の 3 か月は移植件数が大きく減った。その後は件数も戻ってきている。

＜溝口＞　非血縁者間移植から他の治療に移ったという理由ではないか。他の移植が急増しているようだが、結果として非血縁間移植ができないため他の移植を行ったのか。それともよりよい治療が他にあり積極的にそちらを選択したのか。その辺の状況はどうか。

＜小寺＞　2020 年 3 月～6 月は新型コロナ第一波で大きな影響を受けた時期である。その期間における本邦の同種の造血幹細胞移植（ハプロ移植を含む血縁からの骨髄・末梢血幹細胞移植、当法人ドナーからの骨髄・末梢血幹細胞移植、さい帯

血移植）を見ると、当法人ドナーからの移植は減少しているがそれを補う形で、さい帯血移植やハプロ移植が増えている。特に血縁者間のＨＬＡ半合致移植（ハプロ移植）が増えていて、この 4 か月間の本邦の同種造血幹細胞移植の合計は 2019 年の同期間を上回っていたという結果がある。造血幹細胞移植の全体のアクティビティーはコロナ禍であっても維持されたことになると思う。その後、当法人ドナーからの移植は回復しつつあり、元に戻っていくのではと考える。

＜溝口＞　非血縁者間移植の有用性は十分皆さんに認められているということか。

＜小寺＞　その通りである。

＜梅田＞　ドナー登録者数は年度では大きく減少しているが、最近の登録者数は回復傾向であると回答があった。大学が休校になり大学でのドナー登録会、イベントや企業での登録会が激減している。一方で自治体や献血ルームでの登録は、非常に頑張っていると認識している。登録会で説明を頑張っているのが、地区普及広報委員と説明員である。これらの方々がコロナ禍の中、3 密を避けるなどの対策を取りつつ全国で頑張っている。敬意を表したい。次はドナー助成制度についてである。ドナーへの助成制度として昨年は 86 の自治体が導入し、増えているという報告だった。制度継続や導入を検討する自治体に情報を提供しているとのことだが、導入に積極的でない自治体に対しても積極的に依頼したいと思う。私自身は千葉県で活動をしているが、54 の自治体のうち現在 49 まで導入が進んでいる。数年前から全自治体に直接働きかけている。県庁からも働きかけてもらっている。導入していない自治体に対しては、登録会などの場で直接働きかけている。千葉県では未導入が残り 5 というところまできた。千葉県以外でも未導入自治体にぜひとも働きかけていただきたい。

＜大谷＞　経費節減に「自然減」と「努力減」があるとの説明だった。努力減について聞きたい。ＷＥＢ配信やバンクニュースの件、会議のＷＥＢ化などで経費を非常に軽減できたことがわかった。今後も経費節減は大切である。しかし節減していくことによって何か問題が起きていないか。金銭面だけではなく良かった点などを考慮し、今後も経費削減を続けていく考えがあるのか。コロナ禍が収束したら（2020 年度の）経費節減を元に戻そうと考えているのか。

＜渡邊＞　成長分野に必要経費を投資するという考えに変わりがない。ここで言う成長分野とは、若年層ドナー獲得のために従来の紙媒体中心のＰＲではなく、ＷＥＢやＳＮＳといった若い人たちに浸透しているメディアからのアプローチである。これは喫緊の課題であり、既に取り組んでいる。昨年度はＬＩＮＥの公式アカウントを開設し、今後は Instagram 開設なども視野に入れている。経費節減という点では、紙媒体より電子媒体はお金がかかる。我々がアプローチしたい若年層への浸透度を考えると、確実にＷＥＢとなる。当法人が発足した 30 年前であれば紙媒体を配る方法しかなく、その方法を踏襲してきたが、ＷＥＢへのシフトは既に始まっておりコロナ禍をきっかけに加速すると思われる。先ほど寄付の話もあったが、寄付は今までは郵便局や銀行での振込みやクレジットカードで受け付けていたが、昨年度から電子マネーでの寄付も受け付けている。若年層が皆持っているスマホから簡単に寄付ができる仕組みであり、成長分野

と考えている。電子マネー業界から個別にアプローチを受けており、大手電子マネー企業が今後どれだけ当法人と提携してくれるかはわからないが、広報渉外部を中心に（提携拡大に向け）布石を打っている状況である。

＜大谷＞　承知した。よろしくお願いする。

＜溝口＞　ドナーの入院日数について聞きたい。埼玉県で献血推進のために小中高校などで授業や講演を行っている。その際に骨髄バンクに触れている。「ドナーは2泊3日の入院が必要」と説明してきたが「3泊4日」という話を聞いた。資料でも「入院日数3泊4日」が一番多いようである。これは方針として決まっているのか。それもと結果としてこうなっているのか。

＜中尾＞　入院日数は3泊4日が多くなっている。採取の前日に入院し、採取し、翌々日の朝に退院というパターンが多い。施設の事情により入院が1日早いなどはあるが、必要な日数としては3泊4日としている施設が大半である。

＜小達＞　コロナ禍において医療コーディネートを対面からオンラインに移すことにより、業務の運営や遂行に何らかの支障が起きたことはあるか。

＜吉川＞　3密を避け行動制限がある中で、厚労科研豊嶋班のご協力によりiPad等の機材を提供いただき、リモート面談を2021年1～3月に実施した。それまでも緊急的な措置として、スマートフォンやコーディネーターが使うタブレットを用いてＷＥＢ面談を何件か実施している。今まで実施していなかったタブレットの設置やＷＥＢ面談の手続き等は、事務局や担当コーディネーターに幾分負担があったと考えている。皆に協力いただき、面談をなんとかこなしていただいているというのが現状である。

＜小達＞　説明は対面からオンラインへ今後移行していくと考えてよいか。

＜吉川＞　スムーズに移行していくのは難しいと思う。今回ＷＥＢ面談を初めて取り入れて（状況をみながら）検討していきたい。完全にＷＥＢ面談に切り替わるというよりは、遠方のご家族や制限のある状況下でも選択肢としてＷＥＢ面談を実施できるようにしたいと考えている。

＜中尾＞　コーディネート現場からの状況を補足させていただく。コーディネート現場ではＷＥＢ面談は初めてのことで不慣れな点もあり、スムーズにいかないところは確かにあった。しかしメリットもある。遠方のご家族に（新幹線や飛行機を使って）来ていただく手間が省け、人数の制限もない。今までは交通費や面談場所の広さ等のこともあり、両親が話を聞きたくてもどちらか一人だけということも多くあった。それらを気にせず、聞きたい方はＷＥＢ上で聞いていただける。メリットとデメリットを分析しながら、新しいツールとして取り入れていけるかどうか検討していきたい。

＜梅田＞　コーディネート期間の中央値の推移として示されているグラフに関して質問したい。2018年度が患者登録から移植までの期間とドナー開始から採取までの両方で、今までの努力で最小値である。2019年度と2020年度は少しずつ日数が増えている。コロナ禍の影響もあるのかという点と、コロナ禍が収まったら少なくとも2018年度の数値まで戻るとみてよいか。コーディネート期間は非常に重要で、非常に関心を持っている。

＜小川＞　2020年度はコロナ禍の影響を明らかに受けた。2019年度が2018年度より2

日延びている点は、様々な方向から分析したが明確な原因はつかめていない。2日間の延びは誤差の範囲と考える。2021 年度は 2018 年度程度を目指し短縮していきたい。

＜河＞　先ほど梅田評議員が現場で努力されている説明員の方に敬意を表したいと申されていた。そのとおりだと思う。骨髄バンクのドナー登録者数はどんどん減っている。コロナ禍の影響があってもなくても一緒だと思う。ただ地域別に見ると、説明員の方が非常にアクティブにやっている地域は登録者数がものすごく増えている。彼らは当然のこととして頑張っているが、骨髄バンクとして表彰するなどそういう支援があってもよいのではないか。説明員に任せっきりにしているように見られる部分があるので配慮してほしい。

○第 2 号議案、第 3 号議案
共に質疑なし

４）第４号議案：理事の選任（非公開）

第 4 号議案は人事案件のため決議は非公開で実施した。可決承認後に議長が下記 3 名の候補者の選任を口頭報告した。

○新理事（五十音順、敬称略）
岡本 真一郎、鎌田 麗子、瀬戸 愛花

５）第５号議案：監事の辞任と補充選任（非公開）

第 5 号議案は人事案件のため非公開で決議された。監事補充選任に関しては評議員会議長と理事長に一任とし、採決の結果原案どおり可決承認された。

８　議事の経過の概要と結果（報告事項）（敬称略）

１）30 周年記念大会概要

小島広報渉外部長が資料に基づき報告した。

10 月 2 日（土）午後に 30 周年記念式典を霞が関のイイノホールで開催する。式典をライブ開催し、続けて事前制作したＷＥＢ番組を舞台上の大スクリーンで来賓の皆様にご覧いただく。会場に来場いただけない全国の関係者には、記念式典とＷＥＢ番組をネット配信する。来賓には厚労大臣や日本赤十字社長、骨髄バンク議連、全国骨髄バンク推進連絡協議会、歴代の理事長経験者などにお願いしている。評議員の皆さまにもぜひご参加いただきたい。式典後は舞台上で記念写真（集合写真）を撮影予定である。今までは式典後にシンポジウムや講演会などをライブ開催していたが、コロナ禍のためＷＥＢ番組を制作してご覧いただく形とした。ＷＥＢ番組の内容は、著名人による対談、感謝状の贈呈団体や（次回開催地である）広島県知事や広島市長、移植経験者からのメッセージなどを想定している。30 周年記念誌も作成しており、世界骨髄バンクドナーデーである 9 月第 3 土曜日（9 月 18 日）に発行予定である。記念名刺も作成して各方面に配っている。バンクカラーであるオレンジ色の記念ストラップも作成し、全国の説明員、コーディネーター、役職員に配付した。

以上